
研究ノート

語りにみられる離島の介護職員の職業意識

吉川 直人

Occupational awareness of care workers on remote island through their narratives

Naoto Yoshikawa

Key words: Intimacy, Positive narrative, Negative narrative

I. 目的

日本の高齢化率は、2017年時点で27.3%であるが、離島においては、平均35%という高い数値を示している¹⁾。また、団塊世代すべてが後期高齢者となる2025年問題において要介護者の増加と介護職員の不足は深刻度を増すことが予想される。

本研究では、高齢化が日本の一般社会より進行する離島において、そこで働く介護職員の意識を探ることを試みる。日本の離島数は、北海道・本州・四国・九州に沖縄島を加えた5島の本土を除き、有人離島と無人離島を合わせ6,847である(日本統計年鑑 総務省統計局)。そのうち、離島振興法による離島振興対策実施地域に含まれる有人離島は258島である。離島は、人口の少なさ、高齢化率の高さ、若年層の少なさ、仕事の少なさ、給与水準の低さといった特徴を有している²⁾。

このような特徴が、介護職員の職業意識にどのような影響を及ぼしているだろうか。地理的要因、社会資源の不足、人口減少など、様々な問題を抱える離島で働く介護職員のインタビューを通して、介護職員の職業意識の特徴を明らかにする。離島という生活環境がもたらす要因が介護職員および利用者にどのような影響をもたらしているのかを明らかにすることは、高齢化社会における介護職について展望することに寄与する。

本稿においては、離島の介護施設における介護職員の職業意識の特徴及び介護職員の持つ普遍的な課題、困難感、やりがいを意識調査により明らかにする。さらに進行する高齢化社会において、介護という職業の重要性を展望するための端緒としたい。

倫理的配慮

調査に当たって、京都女子大学臨床研究倫理迅速審査委員会の審査を受けて許可を得た。(許可番号2020-18)

II. 調査地と調査方法

本研究を実施するにあたり、事前に調査協力者を得ることのできたA県B離島を調査地とした。B離島は人口約24,000人、3つの町からなる島である。(平成27年国勢調査)。

主要な産業は農業、近海漁業、菓子、焼酎製造などである。観光開発が進んでいないため豊かな自然が保たれており、1年を通して温暖な気候である。各町の高齢化率は、C町29.7%、D町33.4%、E町35.4%の高齢化率である。B離島は、全国の離島の中でも高齢化率は平均(35%)より低く、人口は多い離島であるといえる。B離島の医療・介護施設として、病院3施設、一般診療所8施設、歯科医院6施設、介護福祉施設55施設である。

B離島C町の介護施設Fで勤務する介護職員を対象として、半構造化面接法によるインタビュー調査を行った。F介護施設は、認知症対応型共同生活介護施設であり、入居者数約18人、介護職員は非常勤職員も含めてほぼ女性で、約20人が業務に従事している。

インタビューは、2021年8月にF施設内において、職務の合間の時間に実施した。プロフィールに関する質問以降は、インタビューガイドを用いて、離島における介護という括りを設けて、1人平均15分~20分程度の面接において、介護業務に従事する立場からの率直な意識を問うた。また面接において、対象者の許可を得て録音した後、トランスクリプションを作成した。インタビュー対象者は、女性6人と男性1人である(表1)。

表1 インタビュー対象者

対象者	年齢	性別	介護業務年数	島内居住年数
a	50代	女性	7年	50年
b	70代	女性	1年半	70年
c	60代	女性	10年	45年
d	70代	女性	6年	60年
e	30代	女性	10年	14年
f	30代	男性	13年	35年
g	50代	女性	半年	20年

Ⅲ. 介護職員の語り

得られたトランスクリプションを、肯定的な語り（Ⅲ-1）、否定的な語り（Ⅲ-2）、介護におけるエピソード（Ⅲ-3）の3つのカテゴリーに分けて紹介する。

Ⅲ-1 肯定的な語り

a: 会話のできる方(施設利用者のこと; 筆者注, 以下同様)であれば, 本人が忘れていても, 家はどどこよね, ああそうだったって思い出したり。もちろんそれは, 記憶力が保たれている人なのですけど。そういうことは結構いいのです。話したら話が続けられて。ほとんどの方, 知ってますよね。大体, 顔は見て。やっぱり, 家の近くや家族の話をする, 笑顔になりますよね。喜ばれるもんね (a-1)。

b: 入所者の中に子どもの頃からたまたま隣近所に住んだ方とかがいらして (b-1)。全然, 介護の経験もなかったんですけど, 母親を15年ぐらいつと介護をしていましたので。来たら, 自分の親と同じようなことをすればよくて。年よりに対しての優しさっていうかそういうのは, もう, 近所のおばちゃんみたいな感じで, ここの人たち, おじいちゃん, おばあちゃんみたいな感じで接することができるから, すごく職場っていうのもあるんですけど, すごく愛しいっていうか, そういう気持ちになります (b-1)。自分でもこの仕事をして始めてそれを気付いてびっくりしています。ここにいらしてる方たちのことは, 例えば, 病院の看護師さんがしているように, 自分もできたらいいなとか思ったりして。

c: いろんな仕事しておりますから, その中でちょっと知り合った人がいて, ここで「あ, ここにいたの?」とか言って話して親しくした人はいるんですけど。やっぱり, 安心感がありますよね。知ってる同志なので (c-1)。全部まで知っているわけではないので, あんまり密接に

してもいけないのかなって, その人の嫌なところもあんまり, よくは知らないの。だから, ちょっと距離置いて親しく話すぐらいかな。メリットといたら, 顔見知りっていうことで親しく話ができる。知っているっていうことで別に区別はしないんですけど。家族を知っているんですよ, 本人とは知り合ではないんですけど。いろんな声掛けができる。利用者さんに, 娘さんのこととか声掛けができるのはいいのかなって (c-2)。

d: 親族や近所の方とか入所されてる方もいますので, 知ってる方も多いです。利用者さんは前から知ってるからすごく心を開いてくれるんです。一緒にいると安心とか, いてくれてすごうれいとか, そういうことを言ってくださるし, その家族の構成もよく分かるので, 事情が分かるということではすごくメリットだと思います (d-1)。

e: 利用者さんも島で生まれて育っているの, そのご家族を知っていたり, 状態とかが分かると思うんです。本当に関わりが, 親近感が湧くというか, 介護においてもまた, 方言とかの使い回し, 私, あまり上手じゃないんですけど, 方言とか使うことによって, 利用者さんの会話を引き出しやすいとか, やりたいことが分かる (e-1) とか。それはベテランの方のほうがやっぱり上手だと思うんですけど, それは日々勉強だと, 私も思ってるんですけど。それはやっぱり, ゆったりした感じで利用者さんが安心して過ごせるようになっていう面では, 離島の介護はしやすいのではと思うんです。年配の職員のほうが, あの人の知り合いのお母さんっていう目線で, 多分, 入って。私たちが入るよりは, 多分, 知り合いのお母さん, お父さんっていう感じ (e-2) なのかなと思ったり。そういう面でも, 余計, 分かり合えるところもあるかな (e-2) っ。利用者さんもありがたいっていう感じで。やっぱり, 地域密着っていうか, そういう関係性は, すごい島ならではのなあって思います (e-2)。

f: 島はやっぱり人当たりも良くて, つながりがすごい大事なところでありまして, そういう, なじみの関係の中で, 例えば, 利用者が昔からよく顔なじみでもあったりもするんで, その中でお互いよく知ってるし, いい雰囲気じゃないですけど, 穏やかに。そういう意味では, 結構, その日その日を1日, 穏やかに過ごされているってことなんじゃないかなと。結構, やりやすいっていうか。性格であったり, ある程度は分かっているんで, 常日頃, 支援する中で, 結構, やりやすいっていいです

か。それがいい意味をもたらしてるんじゃないかなっていう。その人の性格もある程度、熟知はしてるんで。こういう言葉使いたらいけないとか、ある程度把握はしてるんで。それぞれの性格も違いますから、そういう意味では結構、やりやすい感じではあるのかなっていう感じです。島っていうのはやっぱり、島口(方言のこと)でしゃべるんです。昔から風習がそうなので。島口をしゃべれる人、しゃべれない人っていますけど、島口がしゃべれてたほうが、お互い、島口同士での会話のほうが、すごい会話も弾みやすいっていうのがあったりして。利用者さんはやっぱり島口がしゃべれるんで(f-1)、しゃべれない人からしたら、何言ってるんだらうっていう感じで、そこで終わってしまう。会話が途切れてしまう。島口がしゃべれる職員だったら、すごい会話がトントン分かる感じで。それがつながるための一つのきっかけになります(f-1)。関係性や距離を縮めるための一つの取っ掛かりにもなるということ。島口って、一番、大事なツールなんじゃないかなって思います。

g: 利用者さんを知ってるから、この人はこういう人とか分かってたら、介護もしやすい(g-1)っていうか。そういう点はいいいんですけど、いろいろ分かってくれるから、その人に頼りやすい、言いやすい(g-1)。いろいろ聞いてくれるか知らんけど、とにかく、利用者さんもちょっと甘えるところ。

III-2 否定的な語り

a: 関係性がある人にも身近な願い事っていうのも、ちょっと気恥ずかしい思いっていうのが、もしかしたらあるのかもしれない(a-2)。

d: やっぱりちょっと、親し過ぎて、線引き。仕事じゃない面でちょっと迷惑が掛かったりとか(d-2)、あるかもしれないですね。経済状態とかいろんな面が分かるっていうことで、知られたくないことも知ってると思われたりすることもあるんじゃないかなと思います(d-2)。

e: 私だったとしたら、介護を受けることになったとしたら、全く今までの自分のことを知らない人にケアを受けたい(e-2)と思うんです。今までの自分のことを知ってる人や、例えば、友人の孫であったりだとか。知られたくない。なるべく、本当に全く知らない方のほうが入ってもらいたい(e-2)。認知症の人でもやっぱり分かっていて、知られたくないっていうのもあるのかもしれないですね

f: ちょっと知り過ぎてしまって(f-2)、なれ合いっていいですか、昔から知ってる関係性がずっと続いているんで。それは、支援する側と支援される側、利用者さんと介護職員という中で、ちょっと踏み込み過ぎてしまう(f-2)っていう部分です。お互いをよく知っているもんですから、知り過ぎてしまっているもんで、それが逆効果なのかな。変ななれ合いっていいですか。

g: あまりにも近過ぎて呼び方とかも何々さんとかじゃなくて、何々ちゃんとか呼んで。なあなあになってしまって、ちょっと、はじめが付かない(g-2)っていうか、そういうところが出てくるかなって。やっぱり、下の世話とかそういうのは、余計見せたくないかもしれないですね。身内でも嫌ですもん。精神面では、見知った関係性なので頼りになったりするけど。頼みやすかったりするけど。精神面ではメリットがあって、身体面ではデメリットがあるかというところですか(g-3)。

III-3 介護におけるエピソード

b: 本人知らなくても、子どもさんを知っている方もいますし、数年間近所に住んでいた方もいらっしやいます。でも、来て、お話しても、全然、向こうがもう忘れて分からないんです。だけど、子どもさんが来たらお姉さんがいてくれて助かるわとか言ってくれたら、私もうれしくなります。島も、狭い地区だから。昔から知っている利用者さんが年取られて、認知症になって、私のことも忘れてるねって思ったときは、やっぱりちょっとショックだったけど、昔話をよくするんです、その方が。そうすると、ああやっぱり、いろんなこと覚えてて、今のこと忘れてても、昔のことは思い出して、よく何だかんだ話したりしてます。今のことはもう、全く忘れてるので。やっぱり、20年、30年ぐらいい前のこととか話すと、ああだったよね、こうだったよねって同じように分かるから。この方が言うことが私にも分かるもんで、話が通じるところがあるのよね。そういう面はすごくいいと思うんだけど。

共同性って言ったら変な話なんですけど、あそこの方が亡くなったからお別れに行こうかっていうのは、本土ではもう、身内とかそういう関係性ばかり。ここは、隣近所とか同級生とか友達とかがみんな行ってお別れするから。そういう島独特の風習、そういうのはずっとなくならないでほしいとは思うんだけど。

c: 主人の祖母が亡くなったので、看取り介護を家でさせてもらったんですけど、介護の仕事をやっているんで、

少し、死に対しての不安感とかが、ちょっとなくなったっていうか。やっぱり、いずれは私なんかに来るとも来ないわけじゃないですか。それに対して冷静に見守ってあげられるように、最近、祖母を看取ったことで分かったような気がして。だから、怖いとかそういうものはなくて、やっぱりどこまで自分が寄り添っていけるかって勉強させられる。訪問介護とか在宅に来てくれるお医者さんとか、いろんなアドバイスしてくれるので、それで勉強になったっていうか。

d: お盆が近づいてくると、利用者さんは、全然、日付が分からなくても、感覚的に分かっている、そわそわして、そして、お盆の準備をしなくちゃいけないってことで、三枚肉を買ってこなくちゃいけないとか、どこそこに行って準備せんといけないとか、そういうことを言い出すんです。だから、そういうような、普通は分からないことも、感覚で分かっている、それが良かったり、悪かったりするんですけど。みんな、ホームシックになって帰りがあって。昨日も、1人の利用者が外に向かって叫んだり。やっぱりそういう、いつもとちょっと違う心が波風が立つようなことはあります。伝統的なお盆の料理を作らなくちゃいけないって、お年寄りだから、やっぱり思っていて。それを買ってこないといけないとか、早く団子を作らなくちゃいけないとか、そういうことを皆さんおっしゃるんですけど。あと、お正月には、島の独特の料理として、豚足とかあいうものを出すと、すごく喜ばれます。だから、そういうところはやっぱり共有するものがあるんじゃないかなと思います。ですから、食事やっぱり、島料理っていうんですか。例えば、本土とかでもし入所されたら、ちょっと食べられないような島独特の料理とかを毎日食べることで、なんか安心感というか、あるんじゃないかなと思います (d-3)。

e: お風呂入れたりとか、足を洗ったりとか、おむつとか替えたりするじゃないですか。「子どもにもしてもらったこと、そんなことしてもらったことないのに。ありがたいね」って言葉をもらうんですけど、実際、多分、私も自分の親だったら、けんかしていると思うので。「他人だからできるよ」とか言って、冗談言うとかすごい喜んでですけど、でも、「ありがたいよ」って言うところからうれしいなって思います。やっけていてよかったなって思います。

f: 普段、介護をしている中で、毎日が同じ作業といえますか。入浴、食事、排せつ。その日その日に応じた介

護をしていますけど、その中でも、結構、精神的にも、ちょっと今日はしんどいなっていう時とかあったり、結構、余裕がない中でしているときもあって。その中で利用者さんっていうのは、すごいスタッフの行動であったり、顔色であったり、そういうのは見てないようで見ているんです。あるとき、女性利用者さんが「ちょっと来て」ってなって、行ったら「あなた大丈夫」って。表面に出しているつもりはないんですけど、利用者さんからしたら、ちょっと表情がすごい大変そうな顔をしていました。普段は冗談言ったり、結構、にこやかにさせて、その場を盛り上げたりしているんですけど、あるとき、そういうことができない時があって。自分では表面に出しているつもりはないんですけど、利用者さんがそれに気付いてしまって、僕を呼び止めて「大丈夫」って言うて、「あんたにはいつも感謝してるよ」って、そういう感謝の言葉ももらったときに、そうなんだなって思って、やっけてよかったのかなっていう。すごい、利用者さんのほうから気に掛けてくれるっていいですか、「あなた、元気ないね」とか言われたり、「大丈夫よ、あなたいつも頑張ってるからえらいよ」みたいな感じで、そういうときはすごい言うてくれるんで。「あんたがいてくれるからありがたいよ」っていうんで、そういう感謝の言葉を言われたときは、やっけてよかったなっていうのは思います。

g: 来てすぐのときに、自分もこういう仕事できるかなって不安に思いながらやっていたんで、排泄介助とか見ているだけだったんですけど、「なんでそんなこと勝手にして」とか言う利用者さんがいて。そう言われて、私、自分自身もそうならやっぱり嫌だから、その気持ちすごい分かって、だから、お風呂入れるのも、1人の人に入れてもらうわけじゃなくて、そのときで人も変わるし、すごい、そういうのは嫌だよとか思いながら。だから、そういうことが、うわーとか思いました。

以上、トランスクリプションの抜粋を紹介した。終始、和やかにインタビューは進んだが、具体的なエピソードの部分では熱く思いを語られる方や、その場面を思い出し、涙を浮かべる方もいた。施設の一角でのインタビューは、そこで働くことの記憶と経験の想起を可能にしたのであろう。また、インタビューは初めての方が多く、戸惑いながらも真摯に思いを吐露していただいた。

IV. 結論

離島において介護施設に勤務する介護職員が、介護業

務においてメリット、デメリットの双方を感じていることが示唆された。離島の特徴である住民間の近い関係性が、安心感をもたらす一方、なれ合いの危険性も感じている。

離島の介護職員の語りをとおして作成したトランスクリプションからコードを抽出し、質的帰納的に分析した。

まず、離島の介護業務に関する肯定的側面【離島の介護におけるメリット】において抽出されたコードは、<近い関係性による安心感><家族、地域とのつながり><島料理の効果><島口の効果>の4つである(表2)。そして、否定的側面【離島の介護におけるデメリット】において抽出されたコードは、<なれ合いの危険性><知っていること、知られること><身体面の介助への忌避感>の4つである(表3)。表2、表3で、それぞれ

のコードを表す語りをデータとして記した。

離島における介護のエピソードでは、利用者からの感謝や励ましが業務継続に及ぼす肯定的な効果についての語りがあった。島料理、島口といった離島の文化がもたらす効果は、利用者との介護職員の共通体験、共通理解がケアに結びついている。離島の特徴である、住民間の関係の近さが、同じ離島の住民でもある利用者との介護職員の関係に波及し、職業意識に影響を及ぼしていることが示唆された。

今回のインタビュー対象者は、離島で生まれ育った方もしくは離島在住歴が10年以上の方であり、離島の文化、風習に親しみ、地域の中での関係性が確立されている。離島に生まれ育っていない利用者、離島居住歴の浅い職員については異なる結果になることが推測される。

表2 離島における介護のメリット

カテゴリー	コード	データの一部
離島における介護のメリット	近い関係性による安心感	ほとんどの方、知ってますよね。大体、顔は見て。やっぱり、家の近くや家族の話をする、笑顔になりますよね。喜ばれるもんね (a-1)
		入所者の中に子どもの頃からたまたま隣近所に住んだ方がいらして。近所のおばちゃんみたいな感じで、ここの人たち、おじいちゃん、おばあちゃんみたいな感じで接することができるから、すごく職場っていうのもあるんですけど、すごく愛しいっていうか、そういう気持ちになります (b-1)
		いろんな仕事しておりますから、その中でちょっと知り合った人がいて、ここで「あ、ここにいたの?」とか言って話して親しくした人はいるんですけど。やっぱり、安心感がありますよね。知ってる同志なので (c-1)
		この人はこういう人と分かってたら、介護もしやすい。いろいろ分かってるから、頼りやすい、言いやすい (g-1)
		親族や近所の方とか入所されてる方もいますので知ってる方も多いです。利用者さんは前から知ってるからすごく心を開いてくれるんです。一緒にいると安心とか、いてくれてすごくうれしいとか、そういうことを言ってくさるし、その家族の構成もよく分かるので、事情が分かるということではすごくメリットだと思います (d-1)
	家族、親族とのつながり	家族を知っているんですよね、本人とは知り合いではないんですけど。いろんな声掛けができる。利用者さんに、娘さんのこととか声掛けができるのはいいのかなって (c-2)
		知り合いのお母さん、お父さんっていう感じ、余計、分かり合えるところもあるかな、地域密着っていうか、そういう関係性は、すごい島ならではの気がします (e-2)
	島料理の効果	島料理っていうんですか。例えば、本土とかでもし入所されたら、ちょっと食べられないような島独特の料理とかを毎日食べることで、なんか安心感っていうか、あるんじゃないかなと思います (d-3)
	島口の効果	方言とか使うことによって、利用者さんの会話を引き出しやすいとか、やりたいことが分かる (e-1)
		利用者さんはやっぱり島口がしゃべれるんで、島口がしゃべれる職員だったら、すごい会話がトントン分かる感じで。それがつながるための一つのきっかけになります (f-1)

表3 離島における介護のデメリット

カテゴリー	コード	データの一部
離島における 介護のデメリット	なれ合いの危険性	親し過ぎて、線引き。仕事じゃない面でちょっと迷惑が掛かったりとか、経済状態とかいろんな面が分かるっていうことで、知られたくないことも知っているとかわれたりすることもあるんじゃないかなと思います (d-2)
		ちょっと知り過ぎてしまって、昔から知ってる関係性がずっと続いているんで。それは、支援する側と支援される側、利用者さんと介護職員という中で、ちょっと踏み込み過ぎてしまう (f-2)
		あまりにも近過ぎて呼び方とかも何々さんとかじゃなくて、何々ちゃんとか呼んで。なあなあになってしまって、ちょっと、けじめが付かない (g-2)
	知っていること、知られること	関係性がある人にも身近な願い事っていうのも、ちょっと気恥ずかしい思っているのが、もしかしたらあるのかもしれない (a-2)
		介護を受けることになったとしたら、全く今までの自分のことを知らない人にケアを受けたい、本当に全く知らない方のほうが入ってもらいたい (e-2)
	身体面の介助への忌避感	下の世話とかそういうのは、余計見せたくないかもしれないですね。身内でも嫌ですもん。精神面では、見知った関係性なので頼りになったりするけど。頼みやすかったりするけど。精神面ではメリットがあって、身体面ではデメリットがあるかということですか (g-3)

近い関係性は、安心感、コミュニケーションの円滑化が生じるものの、支援者と利用者の線引きが困難になることが生じる場合がある。本人を知らずとも家族、親族とのつながりは、家族の関係性につながる。家族的雰囲気、家族の関係によるケアは、安心感や信頼をもたらす一方、知られたくない情報まで知られてしまうことがもたらす否定的側面があることは否めない。近い関係性もたらす影響や効果を理解し、支援に結びつける必要がある。

謝辞

本稿は、京都女子大学研究経費助成（令和3年度）を受けて実施した研究成果の一部である。本研究の实施にあたり、ご協力いただいた方々に、この場を借りて感謝の意を伝えたい。

引用文献

- 1) 総務省統計局, 平成27年国勢調査総務省統計局
- 2) 吉川 直人: 離島の介護職員の意識に関する考察, 青森中央短期大学研究紀要 32, 2019, 223-226

参考文献

介護労働安定センター・平成28年度介護労働実態調査結果について

越田 明子: 離島高齢者の生活と養護老人ホームの現況に関する一考察: 利用者の語りを中心として, 福祉社会学部論 23(3), 2004, 17-32

加藤 正春: 奄美沖繩の霊魂観—生と死の民俗論理, 岩田書院, 2020年

富澤 公子: 長生きがしあわせな島〈奄美〉, かもがわ出版, 2020年

稲垣 尚友: 灘渡る古層の響き—平島放送速記録を読む, みずのわ出版, 2011年

下野 敏見: 奄美・吐カ喇の伝統文化—祭りとノロ, 生活(鹿児島県の伝統文化シリーズ), 南方新社, 2005年

田場 由紀, 大湾 明美, 山口 初代, 砂川 ゆかり: 小離島における生活と介護の課題と高齢者が提案した解決策, 沖縄県立看護大学紀要=Journal of Okinawa Prefectural College of Nursing (18), 2017, 49-53

大湾 明美, 佐久川 政吉, 大川 嶺子: 離島における介護保険制度のケアマネジメントに関する研究—沖縄県有人離島のケアマネジメントの実態から, 沖縄県立看護大学紀要 (5), 2004, 51-58

大湾 明美, 坂東 瑠美, 砂川 ゆかり, 田場 由紀, 山口 初代: 沖縄の「互助」の復活による地域ケアの創造: 小離島の祭りを活かした介護サービス中止の挑戦とその評価から, 文化看護学会誌 11(1), 2019, 2-11